

人とモノを媒介する場所という視座

著者	森 明子
雑誌名	民博通信 Online
巻	167
ページ	20-21
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00009691

人とモノを媒介する場所という視座

文・写真 森 明子

研究の射程

私たちの身のまわりには、由来も帰属もつながりも多種多様なものが混在し、競合や浸潤が起こっている。本共同研究は、異種混濁がすすむ世界において、モノや制度と人間の身体がどのようにからみあい、そこでどのような調整がおこなわれているのか、民族誌研究のアプローチから明らかにすることをめざす。背景には、グローバル化する世界において異質な他者と「ともに居る」ために、「社会的なもの」はどのように構成されるのか、という問題関心がある。

この課題に、本共同研究は「場所」という視座から取り組んでいく。一貫した統一性や集合的なアイデンティティが構成されにくい場所で、「制度化／再制度化」はどのように経験されているのかに注目する。制度は、できごとに対応するためにつくられるが、その制度は同時に、さまざまな立場の人びとの身体を拘束し、人やモノの流れに影響を与える。多種多様な交渉がおこなわれるなかで、新たな行動様式が生まれ、状況に応じてさらなる制度の見直しも起こる。制度が、人びとの身体と、建造物やインフラを含めたモノのあいだを、つないだり切り離したりしている過程を、描き出す。

場所という視座は、そのような制度化／再制度化を、経験のレベルでとらえるために設定される。グローバル化をめぐる議論の多くが、ローカルとグローバルを二項対立的にとらえる傾向があることは、すでに指摘されている。二項対立の図式は、一見すると事態を明瞭に腑分けするように見えるが、現象のダイナミクスをとらえることができない。本共同研究は、場所という視座を設定することによって、静態的な対立図式におさまらない「交渉」の局面にねらいを定める。場所で展開する交渉の局面において、グローバルなものやローカルなものが、どのように経験されているのかを描き出していく。

場所のとらえ方

場所という視座について、本共同研究は、ドリーン・マッシーとジャック・ドンズロの場所・空間論を参照することから出発する。マッシーとドンズロは、ともにグローバル化する世界のコミュニティのあり方を、場所・空間の問題としてとらえ、政治的な視点を踏まえて論じている。

地理学者のマッシーは、首尾一貫性のある安定した所と

しての場所とは対照的に、諸関係の産物として場所をとらえる。その性質は「ともに投げ込まれている」(マッシー 2014: 282) という独特の表現で示される。この場所は「他の人間たちの生活の中にわれわれを巻き込み、そして人間以外のものたちとの我々の関係の中において……我々がどのように応答するのかを問いかけ」る、別言すると「交渉がもたらす難題になんらかの仕方で向かい合うよう要求する」(マッシー 2014: 268-9)。

「ともに投げ込まれている」という表現から浮かび上がってくるのは、移民のイメージである。見知らぬ地に突然投げ込まれた移民が経験するように、現代世界は予期せぬ出会いに満ちている。この多様性と偶然性が相まって構成される場所は「避けようのない不定性 inevitable contingency」を帯びていて、この不定性が、新たな社会的なものを要請するのだとマッシーは主張する (マッシー 2014: 282)。

では、そのような場所は、どのような境域をもつのだろうか。ここで社会学者のドンズロが、2005年パリ郊外団地の暴動をめぐる展開した議論が参照される (ドンズロ 2012)。ドンズロは、問題の根幹は、国家的なものが都市的なものを根絶やしにしたことにあると論じた。都市的なものを代表するのは街区であり、国家的なものを代表するのは、国家が建設した大規模住宅団地である (ドンズロ 2012: 167)。

ドンズロによれば、「都市とは、ひとたび個人が最初の帰属から解放されたとき、別の帰属へと自由で流動的なしかたで結びつけ直す手段であり、そのようにして空虚や不確かさという恐怖を抑制する手段であり、その恐怖を行き来したり離れたり戻ったりしたいという欲望へと変換する手段」(ドンズロ 2012: 196-197) である。そこで問題になるのは、都市的なものは国家的なものとのように接合すればよいのか、という都市の境界性である。ドンズロはそれは「都市の精神」の核心をなすもので、「同時に開いていてかつ閉じている空間を作動させること」(ドンズロ 2012: 196) だという。暴動が起こった大規模住宅団地では「都市の組織が果てなく拡張して空間を侵略した結果」都市の原初の精神が消滅させられてしまったのである (ドンズロ 2012: 195-196)。

マッシーやドンズロの議論を受けて、本共同研究は、場所における制度化／再制度化の経験を、人類学研究として追及

森 明子 (もり あきこ)

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。文化人類学、ヨーロッパの民族誌研究。主な調査地は、オーストリア、ドイツ。編書として『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』（ナカニシヤ出版 2019年）など。



庇護申請者の宿舎となった家族経営のペンションの外観と内部。町はずれに位置し、幹線道路に面している。庇護申請者は、労働と移動を厳しく制限されて、ほぼ2年ものあいだ、ひたすら面接を待つ。壁にDeutschkurse（住民有志によるドイツ語教室）の時間割がある（2017年9月、オーストリア）。

していく。そこで鍵となる問いは、グローバル化のもとでの内的諸関係と外的諸関係の働きかけが、どのように経験されているかである。具体的には、移民や難民、老人や病者などのマイナーな位置付けにある人びとに注目し、彼らと彼らをめぐる人やモノのあいだで展開する交渉の過程を明らかにしていく。たとえば、筆者が調査しているオーストリア国境の小都市は、2015年のEU 難民危機を契機として、急増する庇護申請者の受け入れを担うことになった。庇護申請者の住居や、身の回りのモノの調達をはじめとして、有志によるドイツ語学習コースや交流の催しが企画された。行政、NGO などさまざまな回路で、地域の内外から呼応する動きがあった一方で、呼びかけを拒み、それまでのつきあいを断つ隣人もあった。そこで人とモノがどのように動員され、どのような場所のセッティングが生まれて展開しているのか、注意して見ていく。

不定性のなかにあられる社会的なものに向けて

それにしても「同時に開いていてかつ閉じている空間」がどのように作動するのか、「避けようのない不定性」のなかで社会的なものがどのようにあらわれてくるのか、現段階で見通しがついているわけではない。ただし、それについて考えていくためのヒントはいくつかある。3点をあげよう。

第一は、切り離しながら接近させるモノと、そのモノを共有する人びとがおりなす世界という視点である。それはハンナ・アレントが、活動的生活を定義するために提起したテーブルのイメージを範とする。「世界の中に共生するというのは、

本質的にはちょうど、テーブルがその周りに座っている人々の真ん中（between）に位置しているように、事物の世界がそれを共有している人々の真ん中にあるということの意味する。つまり、すべての介在者と同じように、人々を結びつけると同時に人々を分離させている」（アレント 1994: 78-79）。

第二は、予期せぬ出会いがもたらす連帯の性質を再考することである。隣り合わせた他者は、友にならなくても協力者になることはできる。予期せぬ出会いのなかでは、使える資源を発見し、それを活かす／生かすことが、よく生きることを可能にする。つまり、アクター間の合意や理解を前提にするのではなく、これまで見過ごされてきた、部分的で一時的な連帯が担う意味を、考えてみる必要がある。このような連帯をとらえようとする視点は、異種間も含めた生物と環境の相互作用を扱う生態学のアプローチに通じるところがある。

第三は、施設やモノ、インフラと身体の配置によってあらわれるセッティングと関連して、人やモノの動線に注目することである。他者とともに居る場所を構築するうえで、人の身体やモノの動線から見えてくるものがあるのではないか。

以上に述べたパースペクティブのもとに、場所の接合と分節の局面を、場所にとびこんで調査してきた人類学者の視線と感覚をもって明らかにしていきたい。

引用文献

アレント, H. 1994『人間の条件』（ちくま学芸文庫）東京：筑摩書房。
ドンズロ, J. 2012『都市が壊れるとき』京都：人文書院。
マッシー, D. 2014『空間のために』東京：月曜社。